

大半の学生が教養課程を無駄に過ごし、  
大学を卒業すれば偏った知識しかもたない  
人間をつくりだしてしまう現状を、大学関

係者は見直してほしいと思います。

(大学院生 23歳)

## 「香川大学一般教育部」創設15周年を祝して

小林立

「香川大学一般教育部」が「教養課程委員会」、「一般教育部準備教官会議」、「一般教育担当教官会議」を経て昭和46年7月、正式に発足してから、今年で満15年を数えている。また昭和45年2月、「一般教育担当教官会議」が『一般教育研究』の発行に関する要項」を定め、翌昭和46年10月に創刊号の発行以後、回を重ねて第31号が発行される運びになっている。これらのことは真に慶賀すべきことであり、関係者各位の多大のご苦心とご尽力に対して深く敬意を表したいと思う。

その間、「香川大学一般教育部」にとって重要な意義をもつ事柄が数多く生まれていると思われるが、学内的に見た場合、二つの事を挙げるができるのではないかと思う。

一つは昭和52年4月に一般教育主事の職が法制化されたことであろう。『香川大学三十年史』(121頁)によると、昭和51年1月、教養部を置かない2学部以上の国立大学20大学による「国立大学一般教育担当部局協議会」が設立され、教養部を置かない国立大学の場合、一般教育担当責任者の職を一般教育部長又は一般教育主事として法制上位置づけ、一般教育責任主体を制度的

に確立することを提案し、昭和52年4月一般教育主事制として実現されたという。言うまでもなく「香川大学一般教育部」は香川大学の内部組織であって法令によるものではなかった。従って、一般教育主事の職が法制化されたことは、いわば国家による強力な挺子入れが行われたということであり、「香川大学一般教育部」のその後の発展にとって、その意義は決して小さなものではないと言ってよいのではあるまいか。

昭和46年7月の「香川大学一般教育部」の創設は大学自治の精神の発揚であると言って間違いないだろうと思われるが、大学の内部組織であることから種々の困難が伴うことも免れ得なかったと言えるに違いない。当時の「香川大学一般教育部」が置かれていた状況については、『香川大学一般教育部関係資料集』(昭和57年度改訂版59~62頁)所収の昭和47年10月一般教育部教官会議から一般教育運営協議会に提出された「一般教育責任体制について(要望)(第2次案)」,昭和48年4月一般教育部教官会議から香川大学長に提出された「一般教育部を部局として扱うことについて(要望)」などの歴史的な文書を通じて、その一端は窺い知ることができると言ってもよい

のではないか。そのような当時の状況を打開するために、恐らく昭和51年1月、「国立大学一般教育担当部局協議会」は結成されたものに相違ないだろうし、その運動の成果として実現された一般教育主事の法制化がもつ意義は極めて大きいと評価されてよいのではないか。

「香川大学一般教育部」の理念の一つに「三学部から等距離」（昭和56年4月法学部創設以後は四学部と言うべきだが）がある。一般教育主事の職の法制化は、「各学部から等距離」の理念を「香川大学一般教育部」が実行しやすい環境を整備したと云うことができるのではないだろうか。

一般教育部にとって重要な意味をもつと思われる二つ目の事柄としては、教育学部の大学院設置の問題を挙げることができるのではないだろうか。教育学部は既に大学院設置の概算要求を一般教育主事法制化と

同じ年の昭和52年6月に提出しておられるから長年の宿願であると言ってよいだろう。「香川大学一般教育部」の理念の一つに「一般教育部の教官定員は、別表のとおりとし、その身分は教育学部に所属するものとする」がある。従って大学院設置は教育学部教官内部の専門分化を実質的に一層促進する要因としても作用しようと言ってよいのではないだろうか。

21世紀まであと15年。「香川大学一般教育部」は創設15年の数々の実績と輝かしい成果を踏まえて、今後の15年間、どのような充実と発展を見せることであろうか。21世紀初頭、「香川大学一般教育部」は創設30周年と「一般教育研究」第61号発行を如何なる状況のもとで迎えているであろうか。期待される所は極めて大きいと言って決して過言ではあるまい。

## 講道館柔道、タイを往く —その8—

村田直樹

前号迄のあらすじ

一人から三本取る、という法外な八人掛けを無事に終え、ホッとしてシャワールームへ歩いていく途中、知的な光をキラリとその瞳に漂わせるタイの青年に呼び止められた私。

八人掛けという理由も定かならぬ抜き勝負を観衆の中でじっと見詰めていた、と言う。八人掛けは、結局は力の誇示か、とも言った。

ジャージャーと頭を叩くシャワーの水が、火照った身体に気持ち良かった。あの青年は一体何を言いたかったのか。その思いが、シャワーの雨の中で私の脳裡を掠めていた。

\* \* \*

午後の指導がない時は、よく国際交流基金の事務所へ行く。其処には図書閲覧室が在り、日本文化に関心のあるタイやヨーロッパの学生、一般の人々がよく出入りしていた。基金側も、そういった人々のニー